

食薬七研第 10-1654 号

2000年 12月 27日

ジシクロペンチルシランジオールの  
チャイニーズ・ハムスター培養細胞を  
用いる染色体異常試験

厚生省生活衛生局 委託

財団法人 食品薬品安全センター

秦野研究所

# [目 次]

	頁
要約 .....	1
緒言 .....	2
材料と方法 .....	2
1 被験物質および陽性対照物質 .....	2
2 細胞 .....	3
3 S9 反応液 .....	3
4 細胞増殖抑制試験 .....	3
5 染色体異常試験 .....	4
6 染色体分析 .....	5
結果および考察 .....	6
参考文献 .....	7

Fig. 1

Table 1、2

## [要 約]

ジシクロペンチルシランジオール (DPSD) は、CHL/IU 細胞 (チャイニーズ・ハムスター、肺由来) に染色体異常を誘発しなかった。

DPSD の CHL/IU 細胞に対する 50%増殖抑制濃度は、S9 mix 存在下で短時間処理した場合 (S9 反応液中で 6時間処理後 18時間の回復培養) および S9 mix 非存在下で短時間処理した場合 (S9 反応液の代わりに MEM 培地を使用)、それぞれ 0.41 mg/mL および 0.31 mg/mL であった。また、連続処理 (新鮮培地中で 24時間処理) の場合は 0.22 mg/mL となった。

このことから染色体異常試験では、全ての処理系列において、50%増殖抑制濃度の約 2倍濃度を最高処理濃度とし、以下公比 2 で計 5濃度を設定した。染色体分析が可能な最高濃度は、S9 mix 存在下および非存在下で短時間処理した場合、それぞれ 0.40 mg/mL および 0.30 mg/mL の濃度となり、24時間連続処理においては 0.20 mg/mL となったため、これらの濃度を含めて以下 3濃度を観察対象とした。

染色体分析の結果、DPSD は全ての処理系列において、染色体異常を誘発しなかった。

## [緒 言]

化学物質の遺伝毒性を評価するための短期検索法の一つとして、哺乳動物培養細胞を用いる染色体異常試験がある。化学物質によって誘発される染色体異常には、大別して構造異常（ギャップ、切断、交換）と数的異常（倍数性細胞、異数性細胞）があり、前者はDNA傷害、後者は細胞の分裂機構の異常などを反映している。本試験で用いたCHL/IU細胞は、染色体数が少なく、一般的に化学物質に対して染色体異常の検出感度が高いため、染色体異常試験によく用いられる。

変異原物質の細胞内の標的（DNAまたは紡錘糸など）に対する作用は、直接作用する場合と、代謝活性化されて変異原活性が現れる場合に大別される。しかしながら、試験管内の変異原性試験に用いる微生物や培養細胞では、代謝活性化能が無いかあるいはあっても活性が低いことから、一般的にはラットの肝臓から調製した肝ホモジネート9000×g上清（S9）を化学物質の代謝活性化を検出するために用いる。染色体異常試験においては、直接作用を検出するための処理系列として、S9 mix非存在下での短時間処理および連続処理があり、加えて代謝活性化作用をみるための処理系列としてS9 mix存在下での短時間処理がある。

OECD既存化学物質安全性点検に係る毒性調査事業の一環として、DPSDの細胞遺伝学的影響を評価するため、CHL/IU細胞を用いる染色体異常試験を実施した。なお本試験は、「新規化学物質等に係る試験の方法について」（平成9年10月31日、環保安第287号、衛生第127号、平成09・10・31基局第2号）および「OECD毒性試験ガイドライン：473」に準拠し、「化学物質GLP基準」（昭和59年3月31日、環保業第39号、薬発第229号、59基局第85号、改訂昭和63年11月18日、環企研第233号、衛生第38号、63基局第823号）に基づいて実施した。

## [材料と方法]

### 1 被験物質および陽性対照物質

被験物質であるDPSDの物理化学的性状等はAppendix 1に示した。DPSDは厚生省生活衛生局から提供された後、室温で保管した。本ロットについては、実験期間中安定である

ことが確認された。

試験に際しては、被験物質を使用のつどカルボキシメチルセルロースナトリウム（ロット番号： ）の0.5%水溶液に懸濁して希釈した。

陽性対照物質として用いたシクロホスファミド（CPA、Sigma Chemical、ロット番号：73H0846）およびマイトマイシンC（MC、協和醗酵工業、ロット番号：204AGL）は局方注射用水（大塚製薬工場、ロット番号：K8H73）に溶かし、用時調製して用いた。

## 2 細胞

CHL/IU 細胞（JCRB 細胞バンクより入手）は、牛血清（Cansera International、ロット番号：2608311）を10%含むイーグル MEM 培地（日水製薬）を用い、CO<sub>2</sub> インキュベーター（5% CO<sub>2</sub>、37℃）内で培養した。また、解凍後継代10代以内で試験に用いた（親株の継代数は、1988年2月に入手した時点で4代、現在は21代）。

## 3 S9 反応液

S9（キッコーマン、ロット番号：RAA-396、1999年1月製造）は、フェノバルビタールと5,6-ベンゾフラボンを投与した7週齢の雄 Sprague-Dawley 系ラットの肝臓から調製したものを購入し、使用時まで-80℃に保管した。グルコース-6-リン酸（G-6-P、Sigma Chemical）、β-ニコチンアミドアデニンジヌクレオチドリン酸（酸化型、β-NADP<sup>+</sup>、オリエンタル酵母工業）および KCl を蒸留水に溶かし、混合液として-80℃に保管し、使用時はこれに S9、MgCl<sub>2</sub> および HEPES を加え、S9 mix とした。S9 mix 存在下で短時間処理する場合、S9 mix、2倍濃度 MEM 培地（血清不含で、S9 mix と被験物質調製液の添加量の合計と等量）および MEM 培地（血清不含）を混和して S9 反応液（被験物質調製液を 10 vol% で添加したときの各成分の最終濃度：5% S9、0.83 mM G-6-P、0.67 mM β-NADP<sup>+</sup>、0.83 mM MgCl<sub>2</sub>、5.5 mM KCl、0.67 mM HEPES）とした。一方、S9 mix 非存在下で短時間処理する場合は、S9 反応液の代わりに MEM 培地に 2倍濃度 MEM 培地（被験物質調製液の添加量と等量）を混合したものを使用した。

## 4 細胞増殖抑制試験

染色体異常試験に用いる被験物質の処理濃度を決定するため、被験物質の細胞増殖にお

よぼす影響を調べた。CHL/IU 細胞を 0.25%トリプシンを用いてはがした後、 $4 \times 10^3$  個/mL の細胞懸濁液とし、その 5 mL ( $2 \times 10^4$  個) をプラスチックディッシュ (直径 6 cm、Corning) に播種して 3日間培養した。

S9 mix 存在下で短時間処理する場合、S9 反応液 2.7 mL と培地交換した後、被験物質調製液を 0.3 mL ずつ添加し 6時間処理した。リン酸緩衝塩類溶液 ( $\text{Ca}^{2+}$  および  $\text{Mg}^{2+}$  を含む) で洗浄後、新鮮培地 5 mL に交換し、さらに 18時間培養した。一方、S9 mix 非存在下で短時間処理する場合、S9 反応液の代わりに MEM 培地を用いた以外の操作は、S9 mix 存在下の処理群と同様に行った。また、連続処理においては、新鮮培地 4.5 mL と培地交換した後、被験物質調製液を 0.5 mL ずつ添加し 24時間処理した。

全ての処理系列において、0.063 ~ 2.0 mg/mL (10mM) の濃度範囲で処理した。培養終了後、10%ホルマリン溶液で固定し、0.1%クリスタルバイオレット液で染色した。単層培養細胞密度計 (Monocellater™、オリンパス光学工業) を用い、溶媒対照群と比較した各処理群の相対増殖率を計測した。1濃度あたり 2枚のディッシュを用いた。

## 5 染色体異常試験

DPSD は細胞増殖抑制試験の全処理系列において、CHL/IU 細胞の増殖を抑制した (Fig. 1) 。S9 mix 存在下および非存在下で短時間処理した場合、50%増殖抑制濃度はそれぞれ 0.41 mg/mL および 0.31 mg/mL であった。また、連続処理した場合の 50%増殖抑制濃度は 0.22 mg/mL となった。

このことから染色体異常試験の全処理系列において、50%増殖抑制濃度の 2倍濃度付近を最高処理濃度とし、以下公比 2 で計 5濃度を設定した。なお、染色体異常試験においては 1濃度あたり 4枚のディッシュを用い、そのうちの 2枚は染色体標本を作製し、別の 2枚については単層培養細胞密度計により細胞増殖率を測定した。試験操作は、細胞増殖抑制試験とはほぼ同様に行った。短時間処理では、被験物質を S9 mix 存在下と非存在下で 6時間処理した。連続処理では 24時間処理した。なお、処理群の他、溶媒対照群、陽性対照群および無処理対照群 (培地交換のみ) を設けた。なお、陽性対照群および無処理対照群については、各 2枚のディッシュのみを用いて染色体標本を作製した。

陽性対照群については、S9 mix 非存在下で短時間処理する場合、MEM 培地 2.7 mL に 0.3 mL の局方注射用水を加え、MC を最終濃度が 0.1  $\mu\text{g/mL}$  となるように添加し

た。連続処理する場合は、培地 4.5 mL に 0.5 mL の局方注射用水を加え、MC を最終濃度が 0.05  $\mu\text{g}/\text{mL}$  となるように添加した。また、S9 mix 存在下で短時間処理する場合、S9 反応液 2.7 mL に 0.3 mL の局方注射用水を加え、CPA を最終濃度が 5  $\mu\text{g}/\text{mL}$  となるように添加した。

染色体標本作製のディッシュについては、培養終了の 2 時間前に、コルセミドを最終濃度が 0.1  $\mu\text{g}/\text{mL}$  となるように添加した。培養終了後、培地を除き、0.02% EDTA 含有リン酸緩衝塩類溶液 ( $\text{Ca}^{2+}$  および  $\text{Mg}^{2+}$  を含まない) により細胞をはがし、10 mL の遠沈管に集め遠沈した (1000 ~ 1200 rpm、5 分)。上清を捨てた後、沈殿した細胞に 0.075 M KCl 水溶液 3 mL を加え、30 分間低張処理を行った。低張処理後、固定液 (メタノール : 氷酢酸 = 3 : 1 v/v) を 6 mL 加え遠沈した後、上清を除き、再び新鮮な固定液を加えて遠沈した。固定液の交換を数回行った後、少量の固定液で細胞を懸濁し、その少量をスライドグラス (あらかじめフロスト部分に試験系識別番号、コード番号およびスライド番号を記入) 上に滴下し、そのまま風乾した。1 ディッシュあたり 6 枚のスライド標本作製した。

3% ギムザ液 (pH 6.8 の 1/15 M リン酸緩衝液で希釈調製) でスライド標本を染色後、水ですすいで風乾した。試験計画番号、試験系識別番号および標本作製の日付を明示したスライドケースに、スライド標本をコード番号順に入れて保存した。

## 6 染色体分析

染色体分析に先立って、観察対象とする最高濃度を決定した。すなわち、20% 未満の細胞増殖率を示した濃度については染色体標本作製せず、20% 以上の細胞増殖率を示した濃度のうち、濃度の高い方からディッシュ毎の分裂中期細胞の出現頻度 (分裂指数) を求め、2 ディッシュ共に 0.5% 以上となる最も高い濃度を染色体分析が可能な最高濃度と判断した。

分裂指数 (Table 1、2) により、S9 mix 存在下および非存在下の短時間処理においては、それぞれ 0.40 mg/mL および 0.30 mg/mL の濃度が染色体分析の可能な最高濃度であったことから、これらの濃度を含む 3 濃度群を観察対象とした。また、S9 mix 非存在下で 24 時間連続処理した場合は 0.20 mg/mL が染色体分析の可能な最高濃度であったことから、この濃度を含む 3 濃度群を観察対象とした。また、染色体の構造異常については、日本環境変異原学会・哺乳動物試験研究会 (JEMS・MMS)<sup>1)</sup> による分類法に基づいて分類した。ただし、ギャップについては、ガイドラインに従い、染色体分体幅よりも狭い非染色性部

位と定義し、構造異常誘発性の判定には含めないこととした。染色体分析においては、染色体がよく広がり、かつ散逸していない分裂中期像を観察した。各群ごとに、観察細胞数、染色体型および染色分体型の構造異常の種類と数、倍数性細胞の数を記録用紙に記入した。ディッシュ1枚から得られたスライド標本4枚を、4人の観察者がそれぞれ処理条件が分からないようにコード化して分析した。構造異常は1群200個、倍数性細胞は1群800個の分裂中期細胞を分析した。

溶媒対照群と被験物質処理群間および陽性対照群間で、フィッシャーの直接確率法<sup>2)</sup> ( $p < 0.01$ ) により有意差検定を実施した。また、コ克蘭・アーミテッジの傾向性検定<sup>3)</sup> ( $p < 0.01$ ) により用量依存性の有無を検討した。これらの検定結果を参考とし、生物学的な観点からの判断を加味して染色体異常誘発性の評価を行った。

### [結果および考察]

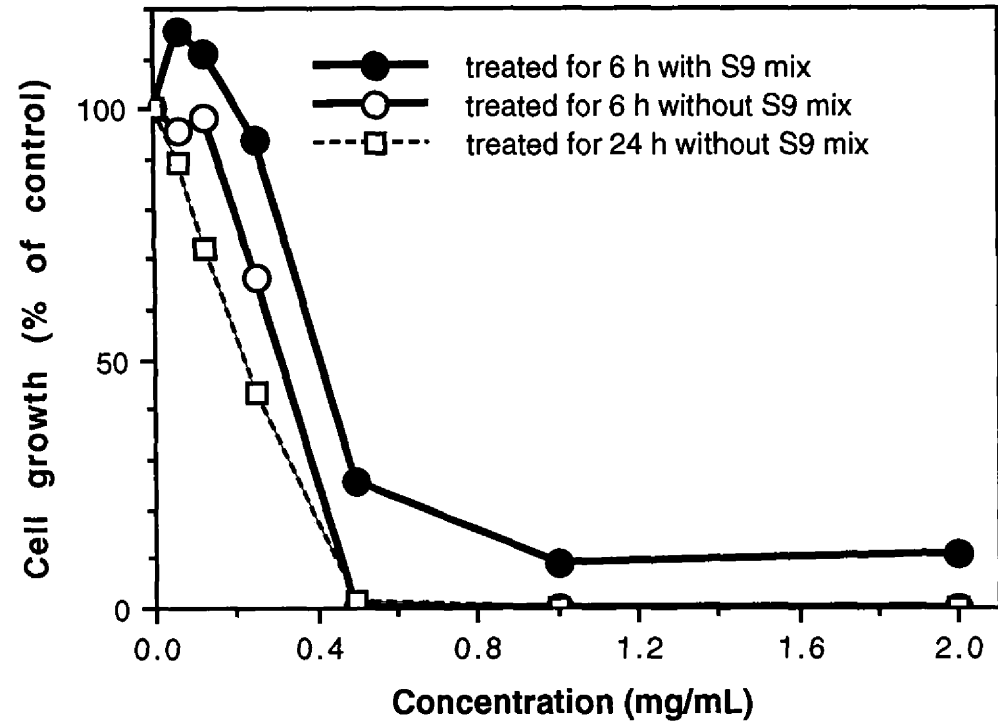
DPSDは全ての処理系列において、染色体の構造異常および倍数性細胞を誘発しなかった (Table 1、2)。一方、陽性対照物質として用いたMCは、S9 mix非存在下の短時間処理および連続処理において染色体の構造異常を誘発し (Table 1、2)、CPAは短時間処理のS9 mix存在下において染色体の構造異常を誘発した (Table 1)。これらの陽性対照物質の結果より、本実験系の成立が確認された。

DPSDは2つのシクロアルカンと水酸基が珪素に結合した珪素化合物 (Appendix 1) であり、珪素化合物の変異原性については様々な報告がある。水素化珪素 (シラン) については、復帰突然変異試験で陽性の結果が報告されている<sup>4)</sup>。また、ジメチルジクロロシランおよびトリメチルクロロシランについては、染色体異常を誘発することが報告されている<sup>5)</sup>ことから、シランそのものについては染色体異常を誘発する可能性が考えられる。しかしながら、メチルトリクロロシランについては染色体異常試験で陰性の結果が報告されており<sup>5)</sup>、シランに結合した基の種類がたとえ同じであっても、それらの結合位置および数の違いにより、分子全体の細胞に対する作用が異なることが示唆される。加えて、シロキサン構造 (-Si-O-Si-O-) にメチル基が結合したジメチルポリシロキサン (シリコーン樹脂) は、染色体異常を誘発しないことが報告されている<sup>6)</sup>。従って、DPSDを含む珪素化合物の染色体異常誘発性は、珪素に結合した基の種類やその結合部位など、分子構造全体によって決定される可能性が示唆された。



[参考文献]

- 1) 日本環境変異原学会・哺乳動物試験分科会編:「化学物質による染色体異常アトラス」, 朝倉書店, 東京 (1988)
- 2) 吉村 功編:「毒性・薬効データの統計解析、事例研究によるアプローチ」, サイエンス社, 東京 (1987)
- 3) 吉村 功, 大橋靖夫編集:「毒性試験講座 14、毒性試験データの統計解析」, 地人書館, 東京 (1992)
- 4) Araki, A., *et al.*, Improved method for mutagenicity testing of gaseous compounds by using a gas sampling bag, *Mutation Res.*, 307, pp. 335-344 (1994)
- 5) Isquith, A., *et al.*, Genotoxicity studies on selected organosilicon compounds: *In vitro* assays, *Food Chem. Toxicol.*, 26, pp 255-261 (1988)
- 6) 石館 基 監修: <改定>染色体異常試験データ集, (株)エル・アイ・シー, 東京, pp.9 (1987) (Chemical No. 644)



**Fig.1 Growth inhibition of CHL/IU cells treated with dicyclopentylsilanediol**

Table 1 Chromosome analysis of Chinese hamster cells (CHL/IU) treated with dicyclopentylsilanediol (DPSD)\*\* with and without S9 mix

Group	Concentration (mg/mL)	S 9 mix	Time of exposure (h)	No. of cells analysed	No. of aberrations						Others <sup>3)</sup>	No. of cells with aberrations		POL <sup>4)</sup> (%)	Trend test <sup>5)</sup>		Concurrent <sup>6)</sup> cytotoxicity (%)	Mitotic <sup>7)</sup> index (%)	
					gap	ctb	cte	csb	cse	mul <sup>2)</sup>		total	TAG (%)		TA (%)	TA			POL
Non-treatment				200	2	0	1	0	0	0	3	0	2 ( 1.0 )	1 ( 0.5 )	0.13			—	—
Solvent <sup>1)</sup> 0	—	—	6 - (18)	200	0	1	1	0	0	0	2	0	2 ( 1.0 )	2 ( 1.0 )	0.13			100.0	—
DPSD 0.075	—	—	6 - (18)	200	1	2	0	0	0	0	3	0	3 ( 1.5 )	2 ( 1.0 )	0.13			114.5	—
DPSD 0.15	—	—	6 - (18)	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )	0.25	—	—	114.5	—
DPSD 0.30	—	—	6 - (18)	200	0	2	0	0	0	0	2	0	2 ( 1.0 )	2 ( 1.0 )	0.13			108.0	23.4, 40.6
DPSD 0.60 ***	—	—	6 - (18)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.0	—	
MC 0.1 µg/mL	—	—	6 - (18)	200	3	67	115	0	0	0	185	0	106 *( 53.0 )	104 *( 52.0 )	0.00			—	—
Solvent <sup>1)</sup> 0	+	+	6 - (18)	200	1	0	0	0	0	0	1	0	1 ( 0.5 )	0 ( 0.0 )	0.00			100.0	—
DPSD 0.10	+	+	6 - (18)	200	1	0	0	0	0	0	1	0	1 ( 0.5 )	0 ( 0.0 )	0.38			98.5	—
DPSD 0.20	+	+	6 - (18)	200	1	0	0	0	0	0	1	2	1 ( 0.5 )	0 ( 0.0 )	0.00	—	—	97.0	—
DPSD 0.40	+	+	6 - (18)	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )	0.13			57.5	26.0, 27.6
DPSD 0.80 ***	+	+	6 - (18)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.5	—	
CPA 5 µg/mL	+	+	6 - (18)	200	0	20	63	3	1	0	87	1	66 *( 33.0 )	66 *( 33.0 )	0.00			—	—

Abbreviations, gap : chromatid gap and chromosome gap, ctb : chromatid break, cte: chromatid exchange, csb : chromosome break, cse : chromosome exchange (dicentric and ring), mul : multiple aberrations, TAG : total no.of cells with aberrations, TA : total no. of cells with aberrations except gap, POL : polyploid, MC : mitomycin C, CPA : cyclophosphamide.

1) 0.5% carboxymethylcellulose sodium was used as solvent. 2) More than nine aberrations in a cell were scored as 10. 3) Others, such as attenuation and premature chromosome condensation, were excluded from the no. of structural aberrations. 4) Eight hundred cells were analysed in each group.

5) Cochran · Armitage's trend test was done at p< 0.01. 6) Cell confluency, representing cytotoxicity, was measured with a Monocellater™. 7) Metaphase frequency, mitotic index, was calculated by counting 500 cells in each dish.

\* : Significantly different from solvent control at p< 0.01 by Fisher's exact probability test.

\*\* : Purity was over 99wt%. \*\*\* : Chromosome specimens were not made because of severe cytotoxicity.

Table 2 Chromosome analysis of Chinese hamster cells (CHL/IU) continuously treated with dicyclopentylsilanediol (DPSD)\*\* without S9 mix

Group	Concentration (mg/mL)	Time of exposure (h)	No. of cells analysed	No. of aberrations							Others <sup>3)</sup>	No. of cells with aberrations		POL <sup>4)</sup> (%)	Trend test <sup>5)</sup>		Concurrent <sup>6)</sup> cytotoxicity (%)	Mitotic <sup>7)</sup> index (%)
				gap	ctb	cte	csb	cse	mul <sup>2)</sup>	total		TAG (%)	TA (%)		TA	POL		
Solvent <sup>1)</sup>	0	24	200	0	1	0	0	0	0	1	0	1 ( 0.5 )	1 ( 0.5 )	0.13			100.0	—
DPSD	0.050	24	200	0	2	0	0	0	0	2	0	2 ( 1.0 )	2 ( 1.0 )	0.00			98.0	—
DPSD	0.10	24	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )	0.13	—	—	83.5	—
DPSD	0.20	24	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )	0.00			56.5	17.8, 18.6
DPSD	0.40 ***	24	—														19.0	—
MC	0.05 µg/ml	24	200	0	32	92	8	0	0	132	0	84 *( 42.0 )	84 *( 42.0 )	0.00			—	—

Abbreviations, gap : chromatid gap and chromosome gap, ctb : chromatid break, cte: chromatid exchange, csb : chromosome break, cse : chromosome exchange (dicentric and ring), mul : multiple aberrations, TAG : total no. of cells with aberrations, TA : total no. of cells with aberrations except gap, POL : polyploid, MC : mitomycin C.

1) 0.5% carboxymethylcellulose sodium was used as solvent. 2) More than nine aberrations in a cell were scored as 10. 3) Others, such as attenuation and premature chromosome condensation, were excluded from the no. of structural aberrations. 4) Eight hundred cells were analysed in each group.

5) Cochran · Armitage's trend test was done at  $p < 0.01$ . 6) Cell confluency, representing cytotoxicity, was measured with a Monocellater™.

7) Metaphase frequency, mitotic index, was calculated by counting 500 cells in each dish.

\* : Significantly different from solvent control at  $p < 0.01$  by Fisher's exact probability test.

\*\* : Purity was over 99wt%. \*\*\* : Chromosome specimens were not made because of severe cytotoxicity.